

菩提梯

三門のすぐ先には、1652年に建てられた古代の階段があります。この階段は「菩提梯」と呼ばれ、「悟りへの階段」を意味します。階段数は287段で、高さは104メートルにもなります。

1632年、日蓮宗の信者である仁蔵が母を連れて久遠寺にやってきました。当時は坂道を上る階段がなかったため、仁蔵は年老いた母を背負って久遠寺にたどり着きました。仁蔵はお寺で、日蓮宗の信者がお参りしやすいように階段を作るための手段を求めて祈りました。漁師の仕事でお金を貯めた仁蔵は、いずれ久遠寺に戻って菩提梯を建立したいと願っていたと言われています。しかし、二度目の久遠寺への道中、仁蔵は富士川で飢えに苦しむ人々の姿を目の当たりにしました。他人の命の方が大切だと考えた仁蔵は、階段のために貯めていたお金を彼らに渡しました。

仁蔵は佐渡の自宅に戻り、再び出稼ぎに出ます。しばらくして久遠寺に戻った仁蔵は、自分で稼いだお金を材料費と労働力に充てて、菩提梯を建てるための看板を立てました。やがて、仁蔵が階段を建てるのを手伝うために大勢の人が集まり、多くの人が小額の収入を得て久遠寺を訪れることに感謝していました。

段数の真の理由は不明ですが、一説には法華経そのものが示唆しています。法華経には二十八章があり、「南無妙法蓮華経」は七文字で構成されています。したがって、二十八章と七字を合わせると二百八十七段になります。

菩提梯の周辺に住む多くの人々は、運動や悟りを求めるために菩提梯の階段を登っています。三門をくぐり、菩提梯への道は熟考の時間と空間として機能します。その後、階段を登り、悟りを開くための最後の挑戦となります。

階段を登らずにお寺に行きたい方は、駐車場にあるエレベーターでお寺の地上階に上がることができます。